



**令和5年度
「女性研究者開花プラン」
支援事業 報告会**

令和6年2月29日（木） 15:00～17:00

講演記録集

目次

次第	3
開花プラン概要説明	4
令和4年度採択者からの活動報告	5
採択経験者からの進捗報告	17
上位職ロールモデルからのアドバイス	23
ダイバーシティ懇談会	28

令和5年度「女性研究者開花プラン」支援事業 報告会



令和6年2月29日（木）15:00～17:00 / Zoomによるオンライン開催

プログラム

- 15:00 開会挨拶
末吉 邦 理事(研究・大学院)
- 15:02 開花プラン概要説明
関 奈緒 ダイバーシティ推進センター長
- 15:05 令和4年度採択者による活動報告（各10分）
小山翔子（自然科学系・助教）
城内紗千子（自然科学系・准教授）
山口智子（自然科学系・准教授）
加賀谷真梨（人文社会科学系・准教授）
- 15:45 採択経験者からの進捗報告（各3分）
阿部晴恵（佐渡自然共生科学センター・准教授）
坂田寧代（自然科学系・准教授）
依田浩子（医歯学系・准教授）
吉羽永子（医歯学総合病院・講師）
佐藤友里恵（医歯学系・助教）
- 16:05 上位職ロールモデルからのアドバイス（各10分）
杉山清佳（医歯学系・教授）
田中咲子（人文社会科学系・教授）
- 16:25 ダイバーシティ懇談会（30分）
テーマ「新潟大学の女性研究者の活躍」
- 16:55 閉会挨拶
関 奈緒 ダイバーシティ推進センター長
- 17:00 終了

開花プラン概要説明

女性研究者開花プラン支援事業

海外派遣/研究専念と上位職に挑戦する機会の提供により、
女性研究者の育成を計画する部局を支援



育成計画
・研修内容
・環境整備
・上位職挑戦
を設定



研修中の
代替要員の人件費
と研究費を助成

女性研究者の背中を押し、部局の意識を高める！

令和2年度～4年度（文科省補助金）

令和5年度～（学内経費）

梅プラン
上位職、150万円

桃プラン
上位職、450万円

桜プラン
教授、1000万円

桜プラン
教授、180万円

～ 採択部局 ～

R2・R3採択	
桜	佐渡自然共生科学センター
桜	医歯学系（医学科）
桜	医歯学系（医学科）
桜	医歯学系（歯学部）
桜	医歯学総合病院（歯科）
桃	人文社会科学系（教育学部）
梅	自然科学系（農学部）
梅	医歯学系（歯学部）

R4採択	
桜	人文社会科学系（人文学部）
桜	自然科学系（工学部）
桃	自然科学系（教育学部）
桃	自然科学系（創生学部）

教授育成9件、准教授育成2件

～ 採択部局 ～

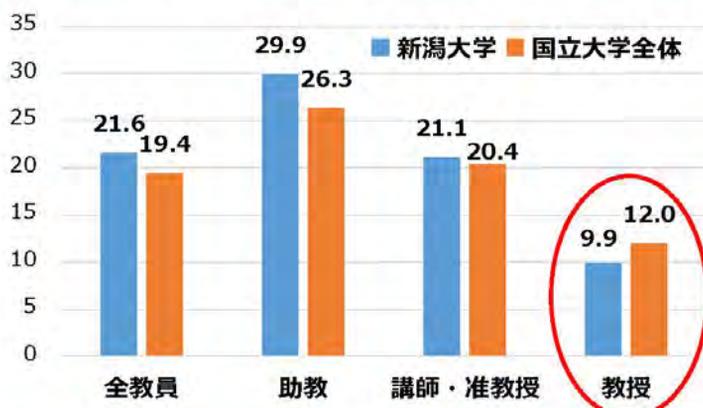
R5採択	
桜	医歯学系（保健学科）
桜	医歯学系（歯学部）

教授育成2件

令和7年度までに **准教授2人**
令和9年度までに **教授11人**

大学教員に占める女性の割合の課題

本学の女性教員割合の状況（令和5年5月1日）



教授が少ない！
女性教員全体や
助教、講師・准教授では
国立大学全体を上回るが
教授は下回る

= 大学の意思決定に
女性が参加していない

そこで
新対策！

女性限定教授公募の人事ポイント付与

➢ 学長裁量ポイント（供出分）

女性教授の人事ポイントが不足する場合に、
2年間、1000ポイントを上限として付与

申請 6件（自然2，医歯2，その他2）

既存の環境整備策

ジェンダーダイバーシティ
部局応援プロジェクト

➢ 部局が計画する取組を助成
支援員の配置、研究スタート
女子中高生向けPV等

令和4年度採択者による活動報告

小山翔子(自然科学系・助教)

城内紗千子(自然科学系・准教授)

山口智子(自然科学系・准教授)

加賀谷真梨(人文社会学系・准教授)

女性研究者開花プラン 令和4年度採択者活動報告

自然科学研究科 数理物質科学系列
創生学部 助教 小山 翔子

2024.2.29. 令和5年度「女性研究者開花プラン支援事業」報告会

令和4年度研修内容と報告

桃プラン経費の約半分を、太字で示した研修のための旅費として使わせていただいた

- 共同研究の推進
 - **台湾中央研究院天文及天文物理研究所(ASIAA)の滞在(計2.5ヶ月)**
 - 主著・共著論文の執筆
- 教育
 - 授業担当
 - (写真)ASIAAから現地スタッフと行った講義
国際理解リテラシーのーコマ
 - 学生の指導
 - 理学部宇宙物理研究室との協力
- 科研費等研究資金獲得
 - **山口大学・国立天文台水沢の滞在**
 - 国内研究者とのネットワーク形成、新技術の習得、
同分野の研究室運営の視察
- 運營業務・リーダーシップ
 - 部局内・全学委員、学会関連の委員等



台湾大学キャンパスと台北の街並みが
広がるASIAA会議室@ 2023.1.12.

令和4年度~5年度の詳細な成果

- 共同研究
 - 共著論文(令和4年度19本、令和5年度11本)
 - プレスリリース → 取材・広報活動等
 - R4.5.13 <https://www.niigata-u.ac.jp/news/2022/149158/>
 - R5.4.27 <https://www.niigata-u.ac.jp/news/2023/399946/>
 - R6.1.18 <https://www.niigata-u.ac.jp/news/2024/549740/>
 - 国際研究会での発表4件(イタリア、台湾)
- 教育
 - 大学院生1名指導中(修士1年, R5.4.-)
- 科研費
 - 基盤C獲得(代表者, R5.4.-)、他検討中
- 運営業務・リーダーシップ
 - 国際会議科学組織委員2件、国内研究会組織委員1件
 - 国内研究会主催@新潟大学 2023.12.13.-15. <https://sites.google.com/view/v-con-symp-2023/>
 - 日・韓・台ミニワークショップ@新潟大学 2024.2.18. (R5学長賞にて5名招聘)
 - EHT科学諮問委員会副議長(R4.9.-)、国立天文台VLBI科学諮問委員会委員(R4.9.-)、日本天文学会学会誌・天文月報編集委員(R5.6.-)

R4.5.13. EHTプレスリリース
天の川銀河中心ブラックホール撮影



R6.1.18. EHTプレスリリース
M87ブラックホール最新画像の公開
新潟大学主導オンライン会見の様子



総括

- 研究に集中する時間を作ることができた
 - 共著論文の出版、プレスリリースに繋がった
- 科研費の獲得に繋がった
- 国内外の研究者と交流の機会が増え、新しい共同研究や研究費獲得の動きに繋がっている

今後の課題

- 主著論文の出版
- 大型研究資金獲得
- 国際共同研究の強化
- 大学院生の指導、女子学生へのロールモデル



2024年2月29日 15:00~17:00 オンライン

令和5年度 開花プラン報告会

桜プラン

期間：2022年4月末～2023年3月中旬

受入れ先：Eindhoven University of Technology

受入れ教員：Angèle Reinders

自然科学系・工学部 城内 紗千子



<昨年度の研修内容①>



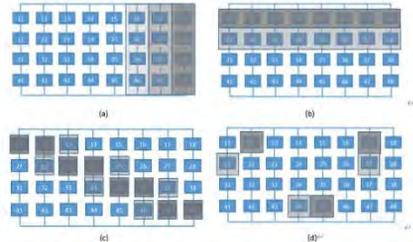
曲面太陽電池モジュールの信頼性試験

TU/e：シミュレーション

大面積モジュール

配線接続のシミュレーション

影による温度と発電効率の低減の影響



新潟大：実試験

1セルモジュール

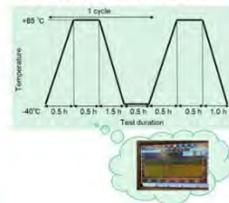
影がかかった時の影響(逆バイアス試験)

曲面構造の耐久性(温度サイクル試験)

逆バイアス試験



温度サイクル試験



<昨年度の研修内容②>



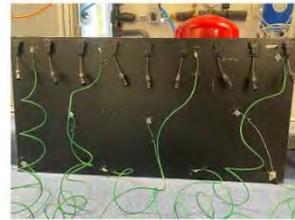
ラウンドロビンモジュールの屋内・屋外測定



Tueのソーラーシミュレータ



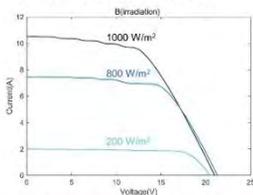
ラウンドロビンモジュール表



裏と熱電対

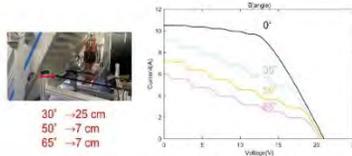
Indoor&Outdoor

0° 1000, 800, 200 W/m²

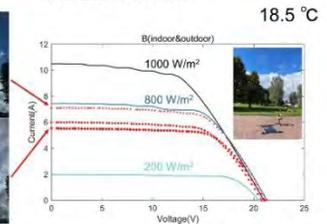


屋内評価測定(照度違い)

0°, 30°, 50°, 65° 1000 W/m²



屋内評価測定(角度違い)



屋外測定

@Eindhoven University of Technology

<部局からのサポート>



2022年度の授業担当

- ★第2ターム(火)と(金)：電気数理 I
→非常勤講師
- ★第3・4ターム(木)：電子情報通信実験 I
→実験 I -1は、オンラインで開講
→実験 I -2は、レポートの確認のみ
技術職員とTAが授業担当
- ★第3・4ターム(水)：電子情報通信設計製図
→プログラム内の教員に代わってもらった
- ★研究室運営
→オンラインで実施(週1回MTGの他、WEBで実験等)

<派生した成果や得たこと>



★研究内容の幅が広がった

- ・有機だけに絞らなくてもいい



★PVSEC-33で発表

- ・ Experimental research on curved photovoltaic modules: effects of hot spots, interconnect schemes and curvature on electrical PV performance



★オランダ・IMEC(ベルギー)・UPM(ドイツ)の 博士後期課程の学生やポスドクの方々と友達になれた

「女性研究者開花プラン」支援事業 令和4年度採択報告 (桃プラン)

自然科学系（教育学部）准教授

山口智子

専門分野：調理科学、食物学、食生活学

担当：教育学部家庭科教育専修
農学部食品科学プログラム 協力教員

地域連携フードサイエンスセンター 運営委員
日本酒学センター 協力教員

研修の内容

■ 海外派遣：

- ①ポルトガルUniversidade de Aveiro（2022年10月30日～11月26日）
ポルトガルの料理・食文化・食事情の調査、保育園児・小学校児童・大学生の食事調査、女性研究者との交流、研究者ネットワークの構築
- ②フランス国立農業・食糧・環境研究所（INRAE）のCentre des Sciences du Goût et de l'Alimentation（CSGA）（2023年2月16日～3月16日）
食品の官能特性評価に関する研修、ワインと食材・料理のペアリング法の研修、日本酒・和食への興味関心度・食文化・食事情の調査、国際共同研究への基盤作り

■ 国内研修：奈良女子大学研究院生活環境科学系高村研究室（2023年3月27日～31日）

米粉パンの品質評価に関する研修、女性研究者との交流、研究者ネットワークの構築

■ セミナーの受講：ダイバーシティ研修会、統計解析の専門的知識・解析法、フードペアリング評価に関する知識と研究法の修得

■ 研究専念：研究（科研費、受託研究、共同研究）の遂行、論文・著書・報告書の執筆、国際・国内学会発表、学生の研究指導

部局からのサポート

■ 各委員会委員の選出の配慮

教育学部家庭科教育専修内での委員選出を免除

教育学部での選挙により選出された2委員会の委員を務めた

■ 管理運営業務の代替者として支援員の配置

■ 担当授業の非常勤講師の雇用による代替

単独で担当する授業のうち3科目を非常勤講師を雇用して代替

オムニバス形式の担当授業は一部免除

■ 学生指導の協力

教育学部家庭科専修学生（3名）と農学部食品科学プログラム学生（2名）の卒業研究、大学院自然科学研究科学生（1名）博士研究の指導について、研修による不在時には農学部教員の協力を得た

*ご配慮並びにご協力いただき、心から感謝申し上げます

派生した成果

■ 共同研究の受け入れ（R4年度1件、R5年度2件）

■ 受託研究の受け入れ（R4年度2件、R5年度1件）

■ 助成金への応募・研究遂行

①R3～5年度科学研究費助成事業（挑戦的研究（萌芽））：代表（遂行中）

②R5年度科学研究費助成事業 国際共同研究加速基金（海外連携研究）：代表

③R5～8年度科学研究費助成事業（基盤C）：分担（採択）

④R6年度科学研究費助成事業（基盤C）：代表（応募中）

⑤日本農芸化学会「第5回農芸化学中小企業産学・産官連携研究助成」：代表（採択）

⑥R4、5年度U-go グラント：分担（採択）

■ 研究業績：著書3冊、査読付き論文6報、総説・解説2報、報告書1件、

学会発表18件（国際学会4件、国内学会12件、要旨提出済み2件）

■ アグリビジネス創出フェア2023への出展

■ 地域活性化に向けたワークショップの講師（福島県只見町にて3回実施）

■ 大学生のための食育セミナーの企画・実施：R4年度1回（米）、R5年度2回（米、小麦粉）

2022年度採択 桜プラン 海外研修報告

人文学部 加賀谷真梨
(民俗学・博物館学)



研修目的・ 計画

滞在先：オハイオ州立大学（米国の民俗学の重要拠点）

滞在時期：2022年10月中旬～2023年3月中旬

- 計画
- ①ロールモデルとなる女性研究者の下で、研究、教育、学会活動に割くエフォートとマネジメントのありようを学ぶ。
 - ②米国における民俗学とフェミニズムの相補的な関係性を明らかにする。
 - ③民俗学研究所との学術交流を礎に、学会間の橋渡し役となる（日本民俗学会の国際的な研究力の強化、及び本学での民俗学の国際共同研究の拠点形成への布石を打つ）

OSU.EDU Help BuckeyeLink Map Find People Webmail Search Ohio State

CENTER FOR FOLKLORE STUDIES

THE OHIO STATE UNIVERSITY
COLLEGE OF ARTS AND SCIENCES

S ARCHIVES FOLKORHIO COLLABORATIONS STUDENTS COURSE MODULES Q

APPOINTMENTS



2022-2023 Visiting Scholar

CFS warmly welcomes Dr. Mari Kagaya as a visiting scholar, joining us until mid-March. Dr. Kagaya is Associate Professor of Folklore at Niigata University in Japan, currently on sabbatical with a fellowship from the Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology. She studies gender relations and aging in island communities in the southern region of Okinawa and is currently trying to make sense of variation in end-of-life care and death customs. While at Ohio State, Dr. Kagaya will have her office in Hagerly 455, inside the Humanities Institute suite.



WELCOME TO FOLKLORE STUDIES

STUDY FOLKLORE >
FACULTY >
FOLKLORE ARCHIVES >





COVID-19 RESOURCES FOR FOLKLORISTS

FROM THE CENTER FOR FOLKLORE STUDIES

①②メンターに学ぶ管理職のあるべき姿



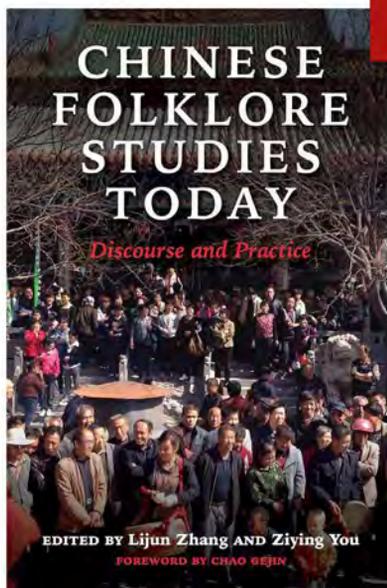


Dorothy Noyes

◀ Amy Shuman の大学院の授業

③学会間の橋渡しとなる

- ▶ 中国民俗学会の最新の研究動向についてまとめた本が2016年インディアナ大学から出版
- ▶ 同様の出版企画を日本民俗学会の国際担当理事に諮り、予算を確保。現在進行中。



④新たな研究テーマに着手

2023年6月の日本文化人類学会の分科会で研究発表

占領下の生殖と政治
John W. Bennettのアーカイブ資料の分析を通じて

加賀谷 真梨 (新潟大学)

2022年11月のアメリカ中間選挙において、人工妊娠中絶の権利の行方が大きな争点となったように、キリスト教社会では現在もなお生殖は政治を揺るがす最大のトピックである。70年前の占領下日本においても、生殖と政治をめぐるSCAP内に大きな痕跡を投げかけた騒動があった。その一つが、Douglas MacArthurによる世論調査課 Public Opinion and Social Research Section (以下、PO&SR) に対する人口問題調査の中止令である。当時のPO&SRの課長 John W. Bennett (1915-2005) によると、この事件は1949年から1950年初頭にかけて生じていた一連の騒動の一つに過ぎず、当時人口抑制問題に関する諍いがSCAP内で渦巻いていたという。占領期終盤になぜ人口問題が「問題」と化したのだろうか。マッカーサーは占領初期より人口問題に強い関心を持ち、1945年9月から50年10月までに6回の人口動態調査を命じている (Oakeley 1978: 622)。また米国家

とて、人口問題調査を担ったPO&SRとは、占領政策に関する世論調査を担った民間情報教育局 (Civil Information and Education Section, 以下CIE) の管轄下にある部署である。CIEは「日本社会の基礎的構造」の解明を目的とし、家族、村落、都市、生活領域の社会調査を主導した (中生 2006: 152)。CIEにはアメリカから人類学者が派遣され、1946年に最初に着任したのが John Pelzel (1914-1999) と Herbert Passin (1916-2003) であり、1949年3月以降はパッシンのシカゴ大学時代からの盟友であるベネットがベルゼルの帰国に伴い着任した。ベネットはオハイオ州立大学の人類学の教員であったが、PO&SRの課長として1949年3月8日から1951年3月15日までの2年間日本に滞在した。関敬吾、竹田且、松田勝徳など日本の民俗学者、人類学者、社会学者をリサーチアシスタントとして起用し、様々な調査業務に就いた。ベネットは2000年以降にCIE在職期間中の文書を含む膨大な資料をオハイ

→分科会の代表が基盤Bに申請、分担者に

→個人で科研費 (基盤C) にも申請



おわりに

Special thanks to

Chikako Inoue and Philip Brown



OSUには、チャンスを掴むために、国を捨てて学びにきている多くの若者がいた。その中には教員になった人もおり、そうした人たちが米国と本国とを繋いでいた。他方、米国で職を得ようとする日本人は、学生も企業の社員も、研究者もわずかしかない。この志向性の違いが、アメリカの大学での日本研究の偏り（歴史学すら駆逐され、文学やアニメ研究に傾倒）をもたらしているように思われる。このままでは、偏った日本理解が広まりかねない。

日本人による実証的な日本研究を海外に売り出すことの重要性を強く感じた5か月でした。

人社系会計係の熊谷さん、上村さんにも大変お世話になりました。記して感謝申し上げます。

採択経験者からの進捗報告

阿部晴恵 (佐渡自然科学共生科学センター・准教授)
坂田寧代 (自然科学・准教授)
依田浩子 (医歯学系・准教授)
吉羽永子 (医歯学総合病院・講師)
佐藤友里恵 (医歯学系・助教)

2023年2月29日

令和5年度「女性研究者開花プラン」支援事業 報告会

佐渡自然共生科学センター 准教授・阿部晴恵

1. 研究：国際共同研究「ツバキ属の種分化に関わる相互作用系」を通じて、東アジアの包括的生物多様性保全の推進



中国と日本に分布するツバキ属の種分化メカニズム

中国から東南アジア (82-280種)



雲南省楚雄市でのツバキ調査

投稿論文 2023年以降

松倉君予, 堀田崇仁, 阿部晴恵 (2023) ツバキ菌核病菌ツバキキンカクチャワンタケの ツバキ属樹種自生地における生態密度と宿主嗜好性 樹木医学研究 27(4) 187-193

ABE et al. (2023) A Comprehensive Comparison of Flower Morphology in the Genus

Camellia, with a Focus on the Section Camellia. Journal of Integrated Field Science (JIFS) (20) 2-9

Abe et al. (2024 submitted) Evolutionary histories of Camellia japonica and Camellia rusticana

2. 上位職へキャリアアップするために自身に必要となる知識や能力：

・語学力や国際的なマネジメント力



雲南大学生態と環境科



昆明植物研究所



2023種生物学会シンポジウム
→2026年度Island Biology
国際学会日本開催
→種生物学会書籍出版

・指導的地位に就くためのマネジメントスキルの獲得

佐渡自然共生科学センター自然史博物館構想に向けたネットワークの形成など



←学生とカマイルカ掘り起こし(骨格標本作成)

投稿論文 2023年以降

澤田聖人, 阿部晴恵 (2023) 佐渡島南西部においてジムグリliの胃内容物から発見されたサドトガリネズミ *Sorex shinto-sadonis* の初記録 哺乳類科学 63(2)

Yoichi et al. (last author H. ABE) The evolutionary history of rice azaleas (*Rhododendron tschonoskii* alliance) involved niche evolution to a montane environment. *American Journal of Botany* 110(4) e16166

Masuda et al. (2024) Genetic consequences of Last Glacial-Holocene changes in snowfall regime in *Arnica mallotopus* populations: A plant confined to heavy-snow areas of Japan. *American Journal of Botany*. Online

継続・発展させている点

- ◆ 山古志をフィールドとした他大学との連携
 - ◆ 闘牛オーナーとしての闘牛大会への参加
 - ◆ 空き家の賃借継続による準区民としての活動
- ⇒新潟県農林水産審議会（生活実感を伴った提言），教育（ワクワク感のある授業），研究（滞在をもとにした書籍を今春出版予定）へのフィードバック

2023年度の活動報告
坂田寧代



2023年6月17日（第1回の農村空間デザイン演習）
早稲田大学（落合基継 准教授）と合同



2023年7月2日（第2回）

被災地間交流

阪神淡路大震災，中越地震，
互いの地を訪問して交流・継承
⇒令和6年能登半島地震の被災地へ



2023年10月23日（中越地震の日）
関西学院大学と新潟大学の学生



2024年1月17日（阪神淡路大震災の日）
神戸市長田区日吉町5丁目町内会
神戸大学（山地久美子 特命准教授）
山古志木籠ふるさと会

医歯学系（歯） 依田 浩子

令和5年度「女性研究者開花プラン支援事業」報告会 2024. 2. 29

➤ 令和3年度 桜プラン（育成期間：令和3年度～令和7年度）

➤ 研修内容： 岩手医科大学歯学部での国内研修（R4.1.11 – R4.2.9）

「歯の形態形成に関する共同研究」

韓国・延世大学歯学部教授と定期的なオンライン
研究ミーティング（コロナ禍により海外渡航計画を中止）

「顎顔面形成機構に関する国際共同研究」

令和5年度の活動状況

- 明確な目標に向かって積極的に行動
- 次世代の育成を意識

1. 研究

本研修での共同研究成果を歯科領域のトップジャーナルに論文発表（IF: 7.6, H-index: 202）

Ida-Yonemochi H*, Otsu K, Irié T, Ohazama A, Harada H, Ohshima H: Loss of autophagy disrupts stemness of ameloblast-lineage cells in aging. *Journal of Dental Research* Feb;103:156-166, 2024.

2. 教育

- 岩手医科大学 大学院特別講義（2022年2月, 11月, 2023年11月） 他大学との交流を継続
- 本学歯学部講義（人体解剖学）→ 心身共になりにハードな実習（3 – 5限, 週2回, 4ヶ月間）

次世代の女性教員確保のためには 学部学生の教育・サポートは重要！！

3. 社会活動

- 学生相談員、ハラスメント相談員（2009年 – ） 女性の相談員を希望する相談者が多い！
- 日本解剖学会 ダイバーシティ委員会（2017年4月 – 2023年3月）
- 日本解剖学会 英文誌, Managing Editor（2021年4月 – ） 人的ネットワークの形成

進捗報告

医歯学総合病院 歯の診療科 吉羽永子

今年4月から歯学部教授職

- 私自身は「これまで教授職を目指したことがない・・・」
- 歯学部長から開花プランに推薦：(目指していいんだ・・・)
- 中野先生(オーガナイザー):「開花プランに手を挙げてくださってありがとうございました」
女性の場合、手を挙げることも自体、並大抵なことではないのが普通
- 開花プラン支援事業：「女性も上位職を目指そう」にも取り組む

研修をきっかけに継続・発展している現在の研究活動

- 大阪大学蛋白質研究所 / 関口清俊 教授との共同研究でのクリエイティブなディスカッション
論文のストーリーが固まった → outputへ(基盤B)
学外でのメンター/チューターとして応援いただく
- 学内；研究環境実現 実験室の整備・提供 → 学内での共同研究が活発 → 更なる波及を目指す

(男女問わず)ブレイクスルーできる「馬力のある」「キーパーソン」になる(なっている)先生の支援

R5年度 女性開花プラン進捗報告

歯学部 高度口腔機能教育研究センター 佐藤友里恵

- 科研費の応募 基盤B、若手研究
- 助成金の応募 中富健康科学振興財団研究助成金 採択
成茂神経科学研究助成基金助成金 採否未定
西山デンタルアカデミー研究助成金 採否未定
- 受賞 UJA (United Japanese researchers Around the world) 論文賞
新潟大学優秀論文表彰

- 論文 1本 (共著者)
A novel macrolide-Del-1 axis to regenerate bone in old age. *i Science*. 2024 Feb;27(2)

- 学会発表 1件

- 歯学部キャリアパス座談会



令和6年度の目標

- 論文執筆 (筆頭著者・責任著者)
- 分野横断的な神経科学研究会の立ち上げ



上位職ロールモデルからのアドバイス

杉山清佳（医歯学系・教授）

田中咲子（人文社会学系・教授）

医学部医学科‘桜’ (R2・3採択) 杉山清佳

チャンスを捕まえられる自分になる

PIになれたらラッキー → PIになる



2006 **意識変革** : たった3年のアメリカ留学中に起きた変化

- **何とかなると**思えるように：**自信**
立ち上げ・引っ越し (トラブル⇔セットアップ)
ライフイベント (結婚、妊娠)
- **独立するのが当然**と思うように：**覚悟**
ポストドクの意識・環境 (臨月のPI Job Talk)
チャンスを捕まえる準備 (高IF論文・研究テーマ)
- **多種多様な主張**をもつべき：**重心**
強い意志・話し合える関係 (両方取りを可能に)



2009

チャンス : テニュアトラック准教授 (PI)
～大型予算獲得



2014

ピンチ : 1人ラボ



2021

開花プラン : 医学部教授を目指す**意思表示**

～ 働きやすさ、面白さは‘自ら’作る ～



★ あらゆる場面での意見の通りやすさ (風通しの良さ)

★ 学内外での立場の明確さ (依頼の変化)

★ マネージメントのしやすさ (自他ともに)

‘多様性’は構成員の気持ち次第

- ★ 女性登用のハードルは下げられる
医学部教授は2022年まで1人, 2024年から4人に
- ★ 出世コースから女性は外れるの怪
 - ① ライフイベントによる脱落
～ 公平な期待と機会を
 - ② 大変そう (賢い女性はやりたがらない?)
～ むしろ意見が通りやすくなる
- ★ 性別を意識しない
女性だから…はやめましょう
ひとりの人として、自分らしく、まっとうする
～ **選んだ理由、そして選ばれた理由は、かならずある**



人文社会学系における昇任

教授昇任の背景

男女格差はない。教育と法では、現学部長は女性。

- 講座制・ゼミ制は基本的になく、教授と准教授の権限の違いは顕著ではない。教授会には助教以上の全教員が出席し、発言権は平等。
- 研究も組織もリベラルが前提

昇任後の新たな活動

コア・ステーションの設立

「芸術型思考研究開発ステーション」

芸術をはじめとする創造性について多角的に研究。

STEAM教育的プログラムを学内外に提供。

メンバーは人、教、工、経の4学部計29名。融合研究教育の場としても機能。

大学博物館関係

- 旭町学術資料展示館運営委員（採用前より）
- ユニバーシティ・ミュージアム構想WGメンバー
- 大学総合博物館検討専門委員（+作業部会）

昇任後の変化

自身の意識の変化

- 若手の昇任や居心地改善のための環境作り
- 全学的活動への視野の拡大



開花プランの研修
は必ず糧になる!!

- ➔ 2つの活動に結実
- ➔ 自身の成長

周囲の変化

- 開花プランの存在感
- ➔ 女性登用への意識の高まり



ダイバーシティ懇談会



はじめに

—話し足りなかったこと・聞いてみたいこと—

(関) ここからは、懇談会となります。ご発表いただいた皆さま、非常に多様な成果、研究だけではなく、これから上位職を目指していく上で必要なマネジメントや教育の成果についても言及していただきありがとうございます。

開花プラン実施主体としてとてもうれしく聞かせていただきました。

また、ロールモデルとして教授職を獲得された先生お二人には、教授になって見えてきた世界の違いや、これからどうしていくかなど、次に続く方々に具体的なアドバイスもあって、本当に力強いなという気持ちでお聞きしていました。ありがとうございました。

先生方の相互作用でもっと情報を還元していきける状況にしていきたいと思いますので、限られた時間ですが積極的に発言いただければと思います。

はじめに、短い中で話し足りなかったこと、他の先生に聞いてみたいことがございますか？

■ 家族の理解や協力について

(小山) 個人的には、皆さま、「どのようにご家族からのご理解、ご協力を得られているのか」というあたりをもう少し詳しく伺ってみたいと思いました。

(杉山) 自分を一番よく知ってくれているのが家族だと思うのです。だからこそ、この人はこう言ったらもう聞かないとか、意志を通したいんだな、あるいは、このチャンスを逃したら後で何を言われるか、といったようなこともわかるのだと思います。だからこそ、自分はこれだけ真剣なんだということを訴えるしかないと思います。

ただ、協力してもらうためには、自分からこうしたらいいんじゃないかとか、こういうことなら自分もできるのではないかと、といったことを具体的に示していく。相手に対してもちゃんとリスペクトを示して、こういうことなら自分も助けられるよというところで、うまく話し合う環境をつくることです。

(加賀谷) 私はこれが最初で最後のチャンスだとずっと思っていましたし、このプランが発表された時点から「行きたい、行きたい」とずっと家庭内で名乗りをあげていました。そのおかげで心の準備期間があったのかなと思います。

また、連れ合いにも海外で生活した経験があって、いかにその経験が後々に活かされるかということを理解していたところがあるので、喜んで送り出すというところまではいかないですが、「頑張ってください」というかたちで送り出してくれました。

それから、出て行ったからには何も求めない。あれもしてくれない、あれはどうなっているんだ、これはどうなっているんだといった思考はシャットアウトしていました。毎日スカイプでは連絡していましたけれども、相手にあまり深く求めないところも大事なのかなと。

■上位職に就くことの本当のメリットは？

(城内) 女性が教授になることについて、学部ごとに伝統や雰囲気が変わったり、なるのは難しいとか、なると発言がしやすくなるといったお話があったと思いますが、その点についてもう少し、本当のメリットというか、具体的に教えていただけますか。

(田中) 年齢が上がれば年齢相応のいろんな役割をしなければいけないだろうとは思っていました。それとともに、教授だとかいう委員会の委員長になるとか、責任のある仕事もついてきます。年齢相応の責任が果たせるということにやりがいを感じます。もし、あと10歳若かったら、別にやりたくないと思ったかもしれませんが、それ相応の年齢になっているからというのもあって、人間として求められることができているかもという満足感、充実感はメリットとして強調したいと思います。

(杉山) 私が教授になったほうが良いと思っていたことは、もちろん組織の中での働きやすさもあるのですが、それ以前に研究者として、そのほうが生存競争に勝てると思ったのもあるんです。そうじゃないと、予算も取りづらくなっていくし、学会などでのパフォーマンス、講演の依頼だったり、シンポジストとして呼んでもらえるか。そういったところも含めて、信用がどこまで得られるかというとき、教授になっていたほうが良いと思います。

先ほど中間管理職みたいな話をしましたが、要は助教、准教授あたりだと、上の方と、あるいは下の方と板挟みになることがあるんですよね。自分でもどうすることもできなくて、歯がゆさを

感じることもあるわけです。教授になってしまったほうが(意見を通す立場になって)、そこは楽だと思います。

あと、私はもっと早くに教授になれていたら良かったと思います。もっと体力的にも精神的にも精力的に動けたなと思っていて。ラボ運営はずっとしていたのですが、一人で動くことには限界があって、教授のように大学雇用のスタッフがいたら、研究に注げる力が全然違っただろうなというところがあります。

(関) その点を疑問に思っていた方も多いと思います。なってみたらよかったというところもあると思いますので、もっともっと、いろんな先生に聞いていただくと思います。

参加者からの質問

(関) 続いては参加者からのご質問です。1点目は海外に行かれた先生、どういうふうに入れ先を見つけたかということについて、ご紹介いただける方、いらっしゃいますか？

■海外研修の受け入れ先の探し方

(小山) 私の場合は台湾で研究員を務めていたこともありまして、もともと関連のあった研究者がいる研究機関ということですので、新たに開拓したところではないのがあります。ほかの、台湾以外の研修先もいくつか検討していたんですが、大半が知っている研究者のいる研究機関という感じで探していました。

(城内) 私の場合は、女性研究者がどういう生活、どういう教育をされているかということが学びたかったので、まず、女性であることを候補に入れていました。しかし、太陽電池の業界で、大学の教授をされている女性はすごく少なくて。自分で直接お願いするのは難しかったので、新潟に着任する前に働いていたところの人づてにお願いして、受け入れてもらいました。

(山口) 私は開花プランに応募するかどうかを農学部の共同研究をしていた先生にご相談したときに、官能評価等の私の専門ではなかったところでスキルアップしたらどう?とご紹介いただきました。

実際には、農研機構からDijonの研究所に行かれていた方とやり取りする中でパスカル氏に行き着いて、現地でもた別の方をご紹介いただいたり。

あと、ポルトガルは、最初に行く予定はなかったのですが、国際学会でできたつながりを広げたいと思い行かせていただきました。

(加賀谷) 私の場合はまったく知り合いではなく、ラブレターを書いて猛烈アタックをかけました。助成金をいただいていること、私のメンターにあなた以上の人はいないということで、有無を言わせないラブレターを書きました。それで一発で、受けていただいたかたちです。

■上位職への最初のステップは手を挙げること？

(関) 次の質問は上に上がっていくときの形、ということですが、これはなかなか回答するのが難しいかもしれませんが、令和2、3年度採択の先生方に順番に聞いてみたいと思います。

(阿部) どう決まるかということに関しては手を挙げる機会とかそういうものではなく、上のほうで決められているのかと思っています。開花プランに応募するのも、「挙げます」と言って「分かりました」という感じです。うちは、ほかの部局と違って人数が非常に少ないので人数が多い中でいろんな物事が決まっていくようなことがないので、上が「いいよ」と言えば、いいということもあります。逆に言うと、上が「駄目」と言ったら通らないということもあると思います。

(坂田) 私もそういうものは流れに任せてというようなところですか。実は、私自身、研修中に不慮の事故で身体的な障害を得たのですが、それもネガティブに考えずに、次に生かしていけたらと考えています。例えば今、合理的配慮が必要な学生さんがいらっしゃるのですが、そういう方が研究室を希望してくれて、一緒に実際のフィールドに出て、地元の人との温かい声掛けをいただくことで、学内で授業を受けているだけでは得られないものを見つけてくれることが、私としてはうれしいことなのです。そういうことを学んでいけるようになったのは、この研修を受けた私自身が一番の成果だったと考えています。ご質問の趣旨とはちょっと違いますが、発言の機会をいただきましたのでお話しさせていただきました。

(依田) 私は、今回の桜のプランには私みずから、学部長に出したいと意見を言いました。

ほかの先生方は、学部長から声を掛けていただいたということですが、私はその声を掛けていただく前に、自分が上位職に就きたいという意思をアピールしました。そして、一緒に仲間に入れていただいた感じです。

私も助教、講師、准教授と上がってきているのですが、幸い、運良くすべて声を掛けていただけて上がってきています。ただ、そのためには、自分も上に上がりたいという意思表示は周りにして、その準備はしていました。例えば、論文をコンスタントに出すとか、教育も真摯に、見えていないところでも頑張っているというところ。周囲へのアピール、意思表示することと、それに対する準備をちゃんと自分でしていくのは大事なかなと思います。

(吉羽) 皆さんのアクティブなお声を聞いていて、いかに私はレアな存在だったか気づき始めました。というのは、それまで上位職を目指そうという気はまったくなくて、むしろ上位職は面倒な派だったわけです。たぶん、自分の中では、さっき杉山先生がおっしゃっていた「心もフリーになれる」という開放感を求めていたのかもしれませんが。ですので、私の場合は、そのタイミングが一致していたんだろうと思います。

(杉山) 何か、がんじがらめになってしまっている人が多いように思うのです。周りからは、女性だから頑張してほしいという、今の女性教員の上位職の率を上げるために頑張してほしいという声と、でも家族からはプライベートを大事にしてほしいという声とか。いろんなところでがんじがらめになったときに、楽な方法は、むしろ自信と覚悟をもって上がってしまうことなんじゃないかと。

まず教員として楽になる、そういう考え方もあると思います。

(依田) 正直なお話をさせていただくと、ほかの大学から「教授選に出ませんか」という声をいくつかいただいていたのを、やはり家族と一緒にいたい、新潟にいたいという思いがあってお断りして、新潟で教授になれたら最高、なれなかったらしょうがないというスタンスできていたのです。

なので、今回の開花プランはとてもいいタイミングで、新潟で教授になれるなら自分のベストということで挙げさせていただきました。

(田中) 部局によってずいぶん違うんだなと思いました。私がいるところは順番です。ただ、声が掛かったとき、順番が回ってきたときに、その要件を満たしている状態であることは本当に大事なことだと思います。

おわりに

(関) ありがとうございます。本当はもっといろいろなことをお聞きしたいのですが、もう時間になってしまいました。

これからもいろんな機会で、こういうかたちで皆さんとお話できる機会を設定していきたいと思えますのでよろしくお願いします。

これにて懇談会は終了させていただきます。ありがとうございました。

ダイバーシティ推進センター

令和6年3月31日

【URL】<https://diversity.nu.niigata-u.ac.jp/>

【E-Mail】diversity@cc.niigata-u.ac.jp

